

翻訳「世界宣教における女性―純潔・母性・女性の福祉」

デーナ・Ｌ・ロバート『キリスト教の宣教』（Dana L. Robert, *Christian Mission: How Christianity Became a World Religion*, Wiley-Blackwell, UK, 2009, 214pp.）

第5章

千葉 浩美

Translation: Dana L. Robert, *Christian Mission: How Christianity Became a World Religion*, Chapter 5
“Women in Mission: Purity, Motherhood, and Women’s Well-being”

Hiromi Chiba, Ph.D

はじめに

本稿は、デーナ・Ｌ・ロバート著『キリスト教の宣教：キリスト教はいかにして世界宗教となったか』（Dana L. Robert, *Christian Mission: How Christianity Became a World Religion*, 2009, 214pp.）の第5章を訳出したものである。ロバート氏は1984年よりボストン大学神学部教授を務め、2001年からは同大学に設立された世界キリスト教宣教センター（Center for Global Christianity & Mission）所長の任にある。キリスト教史・宣教学分野を代表する世界的研究者であり、本稿で紹介する著書のほか、多数の著書のいずれも国際的に高い評価を受けている。とりわけ、キリスト教の中心が世界の中で南方へシフトしている現況についての論説では、世界的権威の一人である。

ここに紹介するロバート氏の著書は、新たな視点から書かれた独自性ある宣教学の概説書といえよう。2部構成で全7章からなる。第1部（第1章～第3章）では、キリスト教会の誕生から現在に至る宣教の歴史が論じられている。続く第2部では、本稿で取り上げる「世界宣教における女性」（第5章）のほか、「宣教のポリティクス（第4章）」「改宗とキリスト教コミュニティ」（第6章）など、

広範なテーマが世界各地の多様な事例とともに論じられている。最後に、「あとがき：グローバルな文脈の中での多文化的宣教」（第7章）で締めくくられている。

なお、この著作は、本来全章の日本語訳がなされ書籍として刊行予定であった。翻訳を発案された共訳者によれば、2013年時点で、著者の了解を受け、新教出版からの刊行が決まり2014年9月に脱稿予定であった。第4章と第5章(83頁～141頁)の翻訳を千葉が、その他の章の翻訳と全体の用語統一を共訳者が担当することが了解され、千葉は予定通りに担当箇所の翻訳を完了した。しかし、その後、共訳者の翻訳が健康上の事情等で頓挫し、訳書の刊行が棚上げとなって現在にいたっている。

以上の経緯により、昨年(国際キャリア学科紀要第10号)で、まず、第4章(83頁-113頁)の翻訳の刊行に踏み切った。さらに今回、同じく千葉が担当し2014年に日本語訳が完了していた第5章を刊行する。本書全体の日本語訳が書籍として出版されないままとなっていることは、まことに残念である。ロバート氏の名著の一部にすぎないが、ここに発表することで多少なりとも注目が得られれば幸いである。

第5章「世界宣教における女性 — 純潔・母性・女性の福祉」

1969年1月、24歳の弁護士であった敬虔なローマ・カトリック信徒、アンナレナ・トネッリ(Annalena Tonelli)は、ケニア北東部の高校で教えるためイタリアを旅立った。当時はアフリカ民族主義の時代であり、新たな始まりの時であった。植民地主義を脱する困難な過渡期を経て — 国によっては比較的穏やかな場合もあったが — 新しい国々が旧宗主国の旗を降ろし、自国の旗を掲げた。希望に満ちた理想主義と植民地主義の後遺症の罪悪感とが入り混じる状況は、ヨーロッパ人ボランティアの心を引き付け、国家建設という大仕事への支援へと向かわせた。

1960年代は、トネッリのような若きカトリック信徒にとって刺激的な時代でもあった。1962年から1965年には、画期的会議となった第二バチカン公会議が司教たちにより開かれ、400年ぶりに教会の神学が刷新された。カトリック信仰推進の一環として、第二バチカン公会議は、教会が「神の民」として「使徒的な」宣

教者のアイデンティティに立つことを再確認した。これにより、礼拝ではラテン語でのミサが排除され、通常の話し言葉が採用されることとなった。また、数世紀ぶりに、一般信徒が積極的に宣教職に従事するよう奨励された。さらに、かつてはタブーであった他宗教との対話が認められ、プロテスタント信徒に敬意が払われるようになった。第二バチカン公会議以後は、すべての文化にキリスト教が馴染むよう肯定的な姿勢がとられ、世界中のカトリック宣教師たちは、現地の一般の人々との関わりを深めた。

アンナレナの信仰は、フォルリ (Forlì) の地方教区で形成され、カトリック・アクションやカトリック学生運動で磨き上げられた。彼女の世代に属する1950年代の大学生たちは、フランスの「労働者司祭」、すなわち、工業労働者に福音を届けるため、彼らと同じ身なりで労働者として生活した人々に影響を受けていた。カトリック・アクションとは、「実際に見て、判断し、行動する」という方法を通して社会問題の解決に従事するよう、カトリック信徒に奨励した宗教運動である。— つまり、まずは状況を観察し、それを教会の規範に照らして判断し、それから状況改善のため行動する、というものであった。カトリック・アクションは、解放の神学の実践方法の型となったが、アンナレナがアフリカへ赴いた頃、ラテンアメリカでは、この解放の神学が台頭しつつあった。1963年、10代の彼女は、郷里で世界飢餓対策委員会 (Committee Against World Hunger) を設立した。当時の時代精神の中であって、アンナレナ・トネッリは、世界をより良き場所にするため熱心に働いた一人の若い女性であった。

ケニアに到着後、トネッリは、砂漠で生きながらえようと苦しんでいたイスラム教徒のソマリア人難民の援助に従事した。ソマリアはかつてイタリアの植民地であったため、彼女は困窮しているソマリア人に対して特別のつながり、もしくは、罪責の念を覚えたのかもしれない。トネッリは、自分の生徒やその家族のあいだで結核が蔓延していることを知ると、熱帯医学とハンセン病治療を学ぶためヨーロッパへ戻った。その後、彼女はアフリカに定住し、残りの生涯を当地で過ごした。

アンナレナ・トネッリは医師ではなかったが、結核に苦しむソマリア人遊牧民の中で33年間暮らした。1984年に彼女はケニアの軍事法廷により逮捕され、砂漠に住む遊牧民グループへの迫害を批判したとして、国外追放処分となったが、彼女はイエス・キリストのためにその人々を擁護したのだと、当局に対し語った。

ソマリアに移住後、彼女は何をも所有せず、ソマリア人と同じ衣食住で生活した。その間、彼女は、待ち伏せ、襲撃、車の乗っ取り、誘拐などの企てに遭いながらも生き延び、人々は彼女の「ソマリア人らしさ」― すなわち、危機に際しても穏やかさを保てる彼女の気質 ― を賞賛するようになった。

1996年にトネッリは、ソマリアの僻地ソマリランドの北西部にあるボラマ（Borama）の町に、ベッド数200床の結核病院を開設するため、友人からの寄付金を募った。この病院は成功を収め、世界保健機構はこれを「中核的結核治療センター」として指定したため、トネッリは、ユニセフ、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、および、カトリックの国際慈善団体であるカリタス（Caritas）から資金を集めることができた。彼女は、この病院から周辺の村々へと活動範囲を広げ、結核その他の病気を治療する外来診療所を創設したほか、年に2度、ドイツから眼科医を招き、これにより、4,000人が視力を回復した。さらに彼女は、聴覚その他の障害を持つ人々や孤児のための学校を開設した。HIV-エイズを患うソマリア人たちもまた、治療のためボラマの病院を訪れるようになった。

アンナレナ・トネッリは、一夫多妻制をとるアフリカ人イスラム教徒のただ中で、独身のクリスチャン女性として生きる道を選んだ。現地では、女性が未婚にとどまることはありえないことであった。彼女の生涯は、20世紀初めのカトリック神秘主義者、シャルル・ド・フーコー（Charles de Foucauld）の生涯と似ていた。フーコーは、第一次世界大戦前に、北アフリカの砂漠でひとり何らの保護も受けずに、遊牧民であるトゥアレグ族の友として生活した。彼は「キリストの実在」を示す宣教の道を生き抜いたのであり、貧民へのキリストの愛のモデルとして、トゥアレグ族に仕えた。フランス人であった彼の人生は、北アフリカにおけるフランス植民地主義の暴力に対抗する働きであり、彼は現地のイスラム教指導者たちと調和して暮らした。一人の改宗者も生み出すことなく生涯を終えたが、彼の理想は、第二次世界大戦後、労働者階級を支援しようとしたカトリック宣教師や、植民地主義に幻滅した大学生たちにより、再発見されることとなる。

アンナレナ・トネッリは、謙遜と奉仕というフーコーの理想に従い、後には、この理想に、神による貧民の「選び」ないし優先という解放の神学の理解が加わった。目立たず謙遜でありたいとの彼女の願いに反して、2003年に国連高等弁務官事務所が栄誉あるナンセン難民賞を授与した時、長年の宣教奉仕への動機について、彼女は次のように語った。

私はイエスに従うことを望み、貧民のために働くことを選びました。イエスのため、私は徹底的な貧しさを選んだのです。もっとも、貧しい人々と全く同じ貧しさに身を置くことなどできないのですが。

私は、修道会による保護を受けず、組織に属することなく、給与を受けず、また、老後のための社会保障の支払いをすることもなく、名も無き奉仕の道を生きてきました。しかし、私には、私と私の民を助けてくださる友がいます。とくに、フォルリの「世界飢餓対策委員会」の人々から助けを頂いています。

私は、シャルル・ド・フーコーの例に倣い、「自分の人生で福音を明示したい」と決意してイタリアを離れました。それから33年間、自分の生活だけによって福音を示してきました。まさに最期を迎えるその時まで、このようにあり続けたいと熱望しています。圧迫され苦しむ人々を思う抑えられない熱情とともに、この思いが、人種、文化、信条の問題を超えて、私の胸深くで私を動かしているのです。¹

アンナレナ・トネッリは、その生き方においてのみならず、死に際しても、シャルル・ド・フーコーという霊的指導者と同じ道を辿った。1916年、第一次世界大戦が原因で北アフリカに混乱が生じ、これに乗じた過激派またはゲリラにより、彼は頭に銃弾を受けた。また、2003年10月5日午後8時30分、一人の男が茂みの陰から飛び出して、アンナレナの頭に2発の銃弾を放った。その時彼女は、患者を診ながら病院の中を歩いているところであり、彼女の死亡時には、その病院で377人の患者が介抱されていた。

ボラマの町は深い悲しみに包まれた。5,000人が集まって、その殺人に抗議し、暗殺の週の金曜日には、ボラマにある30のイスラム教寺院の指導者たちが祈祷礼拝でこの殺人を非難して、彼女の功績を称えた。また、彼女が訪問していた人里離れた村の女性たちは、1日間の断食を布告した。ソマリランドの首都で行われた彼女の追悼礼拝には、副大統領、伝統的長老会議の代表、国連職員が出席した。ボラマの人々は、彼女を「ソマリアのマザー・テレサ」と呼び、彼女の病院をアンナレナ病院、聴覚障害者のための学校をアンナレナ学園と改称したほか、彼女に敬意を表して彫像を建てた。さらに、アンナレナ・トネッリの死は、より深い教訓を示している。すなわち、彼女が愛したソマリアの人々と彼女との個人的関

¹ “The Only Thing That Counts,” *World Mission Magazine*, 15/11 (Dec. 2003), <http://www.worldmission.ph/December03/Annalena%20Tonelli.htm>.

係は、生涯にわたる奉仕を通して築かれたものであり、その絆は、イスラム教徒とキリスト教徒の間、あるいは、アフリカ人とヨーロッパ人との間の歴史的緊張よりも、最終的には強固なものであったということである。

イタリアでは、彼女が殺されたのは、HIV 陽性の人々を他地域から自分の病院に連れて来たためであったとか、もしかしたら、伝統的なソマリアの「割礼者」が少女の性器を切り取る女性性器切除の慣行に反対したためであったといった憶測がなされた。あるいは、世界でイスラム教徒とキリスト教徒の対立が高まった時期に、イスラム教徒の中でキリスト教徒として活動したため殺害された可能性もある。実際には、彼女を射殺したムスタファ・モハメド・ユスフ (Mustafa Mhamed Yusuf) が逮捕されたことにより、彼が新しい病院車の運転手職を得ようとして、彼女に嫌がらせを行っていたことが判明した。

アンナレナ・トネッリが殺された時、米国の新聞は単に「人道援助活動家」の死を報じたにすぎなかった。ロンドン・タイムズは彼女を「ローマ・カトリック宣教師」と呼んだものの、たとえばボストン・グローブやニューヨーク・タイムズのようなアメリカの新聞は、彼女がクリスチャンであることや、キリストの証人という彼女の自己理解については、全く言及しなかった。これは宗教とは無関係のアメリカの主要メディアにみられる典型的な偏りである。しかし、「殉教者」という語の古代における意味は「証人」である。トネッリにみられる貧民との連帯意識や、自らの人生そのものが証言であるという信念は、キリスト教が始まった時から続く宣教の一形態である。伝えられるところでは、アッシジの聖フランシスは、「常に福音を説き、必要な時には言葉を用いよ」と従者たちに語ったという。トネッリの謙遜な奉仕は、数世紀にわたりイスラム教徒に証しを立ててきた多くの人々の道を辿るものであり、イスラム教徒のキリスト教への改宗にはほとんど期待をかけなかった。ソマリア人のアイデンティティに結ばれることこそが、彼女にとっての宣教の道であった。

私をよく知る人々だけが、私が彼らと同じソマリア人であることを認めてくれ、私が救ったすべての人々の真の母であると言ってくれます。「ウト・ウヌム・シント (Ut unum sint)」(彼らがひとつであるように) という願いこそが、私の魂の奥底からの望みでしたし、今もそれは変わりません … 私たちは日々結核治療センターで平和のため、相互理解のために働き、どうすれば赦せるかをともに学んで

います。赦すこと、それはなんと難しいことでしょう。私の知るイスラム教徒の人々は、赦しを人生に求めながらも、それを十分理解することに困難を覚えています … しかし、人生に意味があるのは愛がある場合のみです。愛がなければすべてが無意味です。²

宣教師としての女性

アンナレナ・トネッリの生涯には、奉仕としての宣教の意味や、イエスの名により仕える人々という宣教師の自己理解が明示されている。そして、そこから開かれる窓の向こうには、クリスチャン女性の豊かな歴史が広がっている。すなわち、大きな障害にもかかわらず、地理的、文化的、人種的、民族的、宗教的な境界を越えて、自らの信仰を証した女性たちの歴史である。イエスの墓を訪ねた女性たちが、彼の蘇りを最初に告げ知らせたその日以来、女性たちはさまざまな文化の中で、また、文化の枠を越えて、キリスト教の伝播に参画してきたのである。

世界中で信仰を実践する女性は男性より多い。通常の教会出席、巡礼の旅、家庭での祈り、募金活動、子供たちへの信仰教育という基準で計れば、キリスト教は女性の宗教である。クリスチャンの女性と男性の比率はおおよそ2対1である。カトリック教会内部では、修道女の数、修道士や神父の数の1.5倍を超える。とはいえ、聖職者、説教者、神学者、公的立場の指導者、著名な宣教事業家は概して男性であるため、宣教における女性のきわめて重要な役割は、記録として残されない人間関係の物語の中に埋もれたままである。19世紀末から20世紀までは、カトリックとプロテスタントの両方において、宣教師の過半数が女性であった。それにもかかわらず、最近にいたるまで、宣教史を概説する際に、女性の役割はめったに分析されず、あるいは、一般的に活発な信徒の大半が女性であったこともほとんど認識されずにきたのである。

宣教史における女性の役割には、どのような特色があるだろうか。アンナレナ・トネッリが勇敢で献身的であったことは明白だが、女性宣教師として彼女が行ったことは、彼女独特のものであったのだろうか。もしも男性であったなら、彼女

² Ibid.

は違ったやり方で使命に取り組んだであろうか。アンナレナ・トネッリは、シャルル・ド・フォーコのようなカトリック僧侶や解放の神学の「貧者の選び」という伝統の中に、自らの宣教神学を位置づけたが、とはいえ、社会の縁辺にある人々に仕え、病の癒しに献身し、女性と子供に特別の関心を払った彼女の人生は、女性宣教史の主流に位置するものであった。

正式に任命された男性宣教師の無給の妻として、神の召命に応じた未婚女性として、また、一般の移住者や寄留者として、女性たちは自らの意志で、文化を越えて信仰を証ししてきた。司祭、説教者など正式に任命を受けた聖職者となる機会是否定されていたため、女性宣教師たちは、福音伝道の方法として、主に奉仕という生き方や個人的関係に力を注いできた。男性と女性は共同して活動するものの、多くの場合、男性は教会という組織形成の責任を持ち、一方、女性は、人々の日々の必要を受け持った。宣教活動は教会権力の中枢から離れた周辺部で行われることが多いため、自国では受け持つことのない指導的役割を時には女性が担う場合もあった。このように、アンナレナが歩んだ信仰の証しの道は、女性による女性のための活動としての宣教の意味を照らし出す貴重なものである。まして、信徒の大半を構成し、今日の世界中のキリスト教実践の主力をなすのは女性なのである。

純潔と性的中立

2001年にバチカンで開かれた会議で、アンナレナは独身にとどまるという自らの決断について、次のように語った。「私が独身でいるのは、若い頃自ら喜んでそれを選んだからです。私は自分のすべてを神に捧げたかったのです。そのためには、自分の家族を持たないことが必要でした。ですから、それは神の恵みによるものなのです。」³ 宣教のために結婚しないというトネッリの決断は、女性宣教師に関する最も古い伝統の一つに添うものであった。聖書の時代から現在に至るさまざまな文化において、結婚し子を産むことを女性が拒むのは、文化に逆らう生き方であった。家父長制社会では、子を産む能力が女性の価値の尺度であり、不妊の女性は呪われていると見なされ、多くの文化においては、見捨てられ、虐

³ <http://www.marbriella.it/annalena/inglese/copertina2.html>.

待される存在であった。従って、性交渉を女性が拒むことは、重大な社会的経済的な結果をもたしてきた。それでもなお、歴史を通じて、何千人ものクリスチャン女性が、自分の家族を持つよりもむしろ、性的関係、結婚、出産を犠牲にして神に仕えてきたのである。このような犠牲が必要だったのは、多くの社会において、既婚女性には、育児、高齢者の世話、農作業、食事の提供、地域の祝祭や儀式のための広範な準備などに、すべての時間を捧げることが求められていたためであった。逆説的であるが、独身を選ぶことで、女性は性的に中立となり、伝統的社会における女性の役割への一般的な期待や限界を克服することができたのである。

初期の教会は、ローマ社会における女性の数に比して、非常に大人数の女性たちを引き付けたが、その多くは貧しい未亡人であった。一部の歴史家によれば、結束して貧民に仕えた未亡人たちの修道会が存在し、これは教会により公認されていたという。使徒言行録には、イエスの弟子の頭であったペトロがヤッファ（Joppa）に旅し、未亡人のリーダーを生き返らせた記事がある（使徒言行録9：36-42）。ペトロが生き返らせた唯一の人物として、また、新約聖書の中で「弟子」と称された唯一の女性として、タビタ（ドルカスとしても知られる）は、裁縫や、収入を生み出すプロジェクトを組織することにより、教会の貧しい未亡人や子供たちを養った。未亡人の女性たちが初期のキリスト教運動に加わるにつれて、彼女たちは、社会全般では受けられなかった高水準の支援や尊敬を受けるようになる。また、より裕福なクリスチャン未亡人たちは、再婚して他の男性に財産を譲渡するという道を拒み、ローマ社会の規範を無視することも多かった。かわりに、彼女たちは、自分の財産を用いて貧民に奉仕し、病気の人々の世話をしたのであり、そうすることで他の人々を教会へと引き付けた。

シリア語を話す教会においては、未亡人の役割は「ディーコネス」の役割へと発展した。3世紀初頭にシリア語で書かれた初期教会の手引書『使徒の教え（the *Didascalia Apostolorum*）』によれば、ディーコネス（女性の社会奉仕者）は、「信者の女性がいる異教徒の家に入ること、病人を訪ね、その人々の必要を満たすこと、病気から回復し始めた人々を入浴させることが求められている。」⁴ ディーコネスは、拡大しつつあった教会による宣教活動の最先端に位置していたのである。

⁴ *Didascalia Apostolorum*, trans. G. Homer (1929), ch. 16,
<http://www.womenpriests.org/traditio/didasca.asp#instruct>.

非キリスト教徒の家庭に出かけて病人の世話をすることにより、未亡人たちやディーコネスは、非キリスト教徒の心をとらえるキリスト教的慈善活動の模範となった。著書『キリスト教の興隆 (*The Rise of Christianity*)』の中で、ロドニー・スターク (Rodney Stark) は、初期教会において会員数が急増した要因の一つとして、伝染病の頻発に際し、ほとんどの人が恐怖を抱いて逃げ、病人を見捨てて死なせる中、クリスチャンたちが病人を看病した事実を挙げている。異教徒よりも多くのキリスト教徒が病気から回復しただけでなく、実際に回復した異教徒たちは、クリスチャンの交わりへと歓迎されたのであり、それは周囲にも明らかであった。

4世紀半ばまでには、独身修道女の集団は、教会によって容認された存在となっていた。政府当局にとっては、男性による社会支配を女性が拒否することは、きわめて破壊的な行為であり、そのためキリスト教は危険な宗教であると見なされた。初期教会の歴史家エウセビオス (Eusebius) の記録によれば、修道女となる誓いを立てた多くの女性が、皇帝ディオクレティアヌス (Diocletianus) とデキウス (Decius) による迫害の中、拷問にかけられ、殉教したという。アンキュラ (Ancyra) での迫害では、2,000人の修道女が殺された。殉教の道であるにもかかわらず修道女でいること、そして、修道女であるために殉教することは、キリストの力を証しする行為であった。なぜなら、彼女たちは、女性に要求されている通常の性役割に屈するよりも、むしろ神に仕えることへの女性の献身を、身をもって示したからである。

ヨーロッパでキリスト教が発展するにつれて、一つのパターンが出現する。女性が自らで宣教の機会を獲得しても、いずれ男性の教会指導者により抑圧されるというパターンである。貧民や困窮者に援助の手を伸ばすために独身女性の集団が形成されたが、彼女たちの宣教活動は、制限の厳しい中世の教会規則により、繰り返し阻止された。1298年に教皇ボンifaceティウス (Boniface) 八世は、宗教上の正式な誓いを立てた女性はすべて、常時囲いの中で生活しなければならないと命じた。男性は女性を強姦せずにはいられず、女性は男性を誘惑しないではいられないとの理由であったと思われる。彼の決定により、西洋のクリスチャン女性は数百年間にわたり、組織的救済活動に従事する能力を奪われることとなった。

1535年にアンジェラ・メリチ (Angele Merici) は、貧民救済と女子教育のため、ウルスラ修道会 (the Ursulines) を設立した。案の定、トレント公会議 (1545

-63)は修道女たちを修道院の中に押し込めたが、ウルスラ修道会は宣教のビジョンを抱き続けた。北米インディアンのヒューロン族のあいだでのイエズス会士たちの活動に刺激を受けたためである。1630年代にフランス人ウルスラ会修道女、マリー・ギヤー・マルタン (Marie Guyart Martin) は、宣教師として広大な寒い森林の国へ行くようにと召しを受ける幻を見た。彼女は、マリー・ド・レンカルナシオン (Marie de l'Incarnation) として知られる。独身の誓いを立てた時、自分の「伴侶」となったイエスに全霊を捧げたことにより、彼女はキリストの目標、すなわち、永遠の救いのために人々の魂をキリストへと導くという使命を帯びていると感じた。キリストを愛するがゆえ、マリー・ド・レンカルナシオンは、彼が愛すること、つまり、魂の救いを愛さねばならなかった。

私の肉体は修道院の中にありましたが、イエスの霊に結ばれている私の霊は、そこに閉じこもっていることはできませんでした。私の思いの中では、使徒としてのこの霊が、私をインド地方へ、日本へ、アメリカへ、東洋へ、西洋へ、カナダの諸地方へ、ヒューロン族の国へ、つまり、人々の住むあらゆる地域へと連れて行ったのです。イエス・キリストのものである人間の魂があるところならどこへでも。これらの哀れな魂に対して悪魔が勝利を我がものになっているのを、私は心の目で確かに見ました。悪魔はその人々をイエス・キリストの支配から奪い取ったのです。キリストは私たちの聖なる支配者であり、主権者であり、その尊い血潮により人々をあがなったお方です … 霊において私ははるかに広がるインド地方、日本、中国にまで歩き回り、そこで福音伝道のために働く人々とともにいました。私は霊においてはこの人々と一つであると感じていたので、彼らと固く結ばれているとの実感がありました。肉体においては、私は囲いの中にいなければならない定めでしたが、それでも、私の霊は旅することをやめず、私の心は、幾百万もの人々の魂の救いのため、永遠の父なる神に愛をもって懇願し続けました。その人々の魂を私はたえず神に差し出したのです … 神についてあらゆる国民に教えるだけの知恵を、私は受けています。地の果てにまで聞こえるだけの力強い声を私にお与えください。私の聖なる花婿は、すべての人の心を統べ治めるべきお方、愛されるに値するお方であることを宣言するためです。⁵

カナダに赴くようにとの神からの召命を確信していたため、マリーは彼女を支

⁵ *Marie of the Incarnation, Selected Writings*, ed. Irene Mahoney (New York: Paulist Press, 1989), 113-14.

持しない聖職者たちからの嘲笑や辱めにも耐えた。しかし、カナダのイエズス会士たちが、インディアンの女子のため教師が必要であるとの決定をした時、マリーは志願し、1639年に他の2人のウルスラ会修道女とともに、新世界へと旅立った。近代において異文化へと渡ったカトリック最初の女性宣教師たちである。マリーの霊性は、「キリストの花嫁」であることにとどまらなかった。彼女にとって神と結ばれることは、むしろインディアンの改宗のために働くことを意味した。ケベック到着から一週間以内に、この修道女たちの修道院が完成すると、そこに移り住み、マリーは残りの生涯30年間を、女学校を運営しながら修道院の中で過ごした。囲いの中にいなければならないという規則を死ぬまで守り続けたのである。

北米における最初の女性宣教師、マリー・ド・レンカルナシオンを縛った不利な条件は、19世紀には徐々に取り除けられ、大きな困難にもかかわらず、カトリック女性宣教師たちの勇壮な時代が訪れた。フランス革命後には、新たに結成された女子修道会がヨーロッパから渡り、北米のいたるところで女学校の開設、病院の設立や病人の看護、困窮する移民への支援を行った。1807年には、アン＝マリー・ジェブエ（Anne-Marie Javouhey）が、若者の教育のためクリュニー聖ヨセフ女子修道会（the Sisters of St. Joseph of Cluny）を設立し、フランス領西インド諸島とフランス領ギアナに修道女を宣教師として派遣する。また、マザー・ジェブエは、西アフリカで最初に聖職者として任命されたアフリカ人たちの教育にあたった。1883年には、ドイツ系アメリカ人、マリアンヌ・コープ（Marianne Cope）が、フランシスコ会の6人の修道女を率いてニューヨークからハワイへ渡り、そこで有名なダミアン神父（Father Damien）とともにハンセン病患者の世話をした。この修道女たちは、ダミアン自身の看護もしたが、彼は患者たちから感染したハンセン病のため死亡した。1921年には、アメリカ人初のメリノール会修道女6人が中国に赴き、これが、米国に本拠地を置くこの女子宣教会による最初の海外派遣先となった。中国で、このメリノール会修道女たちは、孤児の世話や学校開設を行ったほか、地域によっては、2人組で伝道旅行をし、村々を訪ねた。

独身を貫くことは、自己の欲望を日々犠牲にすることのように見なされた。しかし、キリスト教史のどの時期においても、それは女性にとってより深い意味を持っていた。すなわち、独身主義は、自らの運命と身体に対するコントロール、そして、男性よりむしろ神に仕えるという決断を象徴するものであった。クリス

チャン女性による独身の主張に、家族はしばしば反対した。なぜなら、それは、娘の性行為や結婚により収入を得ることを期待した親たちにとっては、収入や名声の喪失を表すものだったからである。男性親族が女性の生殖機能を支配していた伝統的社会においては、性的純潔の権利についての女性の自己主張は、クリスチャンとして証しを立てる闘いの現場であり、文字通り殉教の理由ともなった。17世紀初めに日本でカトリック信仰が広がった時、将軍がキリスト教徒迫害を始めた理由の一つは、クリスチャン女性が内縁の妻として仕えることを拒絶したことであった。これは、父権社会であった日本文化における男性の特権に抵抗することであり、前例がなかった。同様に、19世紀初めのハワイでは、クリスチャンの女性指導者が女性たちを洞穴に隠すことがあったが、これは、島を訪れるヨーロッパ人水兵との行きずりの性交渉に、女性たちが屈することのないようにするためであった。そのような性行為を地元の習慣は期待していたし、外国人男性はこれを要求した。

伝統的なアフリカの慣習では、妻の両親への花嫁料の支払いを通して、女性の生殖能力は夫により買い取られていた。しかし、ヨーロッパと同様、アフリカ、アジア、アメリカでも、かなりの数のクリスチャン女性が神に仕えるために独身にとどまることを主張した。南アフリカでは、英国国教会の巡礼者は、毎年「処女殉教者」マンチェ・マセモラ（Manche Masamola）の墓を訪ねる。彼女は両親の反対にもかかわらずクリスチャンになったが、彼女の両親は、娘が伝統的な結婚の取り決めに抵抗することを恐れて、キリスト教の広まりや「花嫁料」の喪失に反対したのである。1928年にマンチェの両親は彼女を打ちたたいて死に至らしめた。北米では、正式な聖職者の道に進んだ最初のアメリカ先住民女性は、福者カテリ・テカクウィサ（Kateri Tekakwitha）であり、彼女は、捕えられたアルゴンキン族の女性とモーホーク族の族長との間に生まれた。カトリック信者になることを決心すると同時に独身の道を選び取った彼女は、迫害され、モーホーク族の村から逃げざるをえなかった。その後、彼女が祈りと他者への慈善に献身する禁欲的生活を送ったことで、多くのアメリカ先住民がクリスチャンになった。「モーホーク族の百合」と称されたこの修道女は、1680年に24歳で亡くなった。

1970年代までには、独身主義の社会的価値が失われ始めたのに伴い、独身の誓いを立てた宗教者としての生き方も衰退した。西洋のカトリック女性は、結婚か宗教生活かという伝統的な選択肢のほかにも、生き方の選択肢を持つようになった

た。しかし、伝統文化が支配的な地域では、女性の独身主義は着実に増加し、しかも、それらの地域では、教会人口は急速に拡大しつつあった。長い歴史を持つカトリックの女性宣教会の中では、西洋人修道女の年齢の中央値が上がった一方で、非西洋人の若い修道女の数も急増した。たとえば、最大規模のカトリック女性宣教会の一つである、マリアの宣教者フランシスコ修道会 (the Franciscan Missionaries of Mary, FMM) は、1877年に気高いフランス女性、マリ・ド・ラ・パシオン (ご苦難のマリア) により創立された。イエズス会士らと同じく、FMMの修道女たちは、福音のため、あらゆる文化的・地理的境界をも越える誓いを立てた。ただし、その活動の多くはインドに集中した。20世紀末には、かつての宣教師派遣先であった地域出身のアジア人・アフリカ人修道女は、ヨーロッパや北米出身の修道女より概して若く、将来の宣教のうねりを象徴する存在となっていた。2004年には、マリアの宣教者フランシスコ修道会士7,400年のうち、3,100人がアジア人であり、ヨーロッパ人は2,100人のみであった。

非西洋諸国におけるカトリック教の強さは、女性たちが福音のために独身を貫くという決断から押しはかることができよう。冷戦期には、反宗教・反帝国主義運動の圧力により、中国人カトリック修道女たちは、自分たちの地域にあった西洋の宣教支部とは連絡を断たなければならなかった。激しい文化大革命への参画者たちは、中国人修道女に結婚を強要した。彼女たちの中には、神父との結婚を装った人々もいたが、他方、19世紀初めの中国人カトリック信徒の「処女」の伝統にしたがって家族の元に戻り、両親と住み、宣教師不在の中、教会を存続させた人々もいた。文化大革命が1976年に終わった後、信仰に身を捧げた中国人女性たちは、独身を保ったまま活動を再開し、子供の教育や新世代の若い女性の訓練にあたった。

20世紀末に女性宗教者の数が最も増加したのは、キリスト教が急成長しつつあったアフリカであった。当初アフリカ人修道女は、アフリカ文化にそぐわないとして地元の反対にあったが、独身のカトリック女性は、次第に、コンゴ、ナイジェリア、ケニア、その他のアフリカ諸国の教会生活において、貴重な存在となった。21世紀初めまでには、ますます多くのアフリカ人カトリック修道女が異文化への宣教師となる選択をするようになる。前時代のカトリック修道女たちは、貧しいヨーロッパ人移民の子供たちに教育を施し、移住者の同胞たちに社会奉仕を提供したが、彼女たちと同様、アフリカ人修道女たちも、アフリカ人移住者たち

のあいだで働く宣教師として、新たな分野へと参入した。アンナレナ・トネッリのように、世界のいたるところで女性が今なお独身にとどまる決断をし、自由に境界を越えて、教師、癒し手、キリスト教信仰の証し人として、他人に仕えているのである。

母性の宣教

アンナレナ・トネッリの殺害から1年後、ボラマの人々は彼女を偲ぶため集まった。長老サウィーア（Sheik Saweer）は、次のように述べた。「アンナレナは我々の中の病気の者や貧民を助けた善人であり、彼女の殺害は、イスラムの教えに逆らう非道であった。我らの預言者が述べたように、その庇護の下にある人を殺すなら、その人がたとえイスラム教徒でなくとも、殺した者はだれもけっして天国の香りをかぐことはない。」⁶ 彼女の名を唱えながら、イスラム教指導者、病院患者、政府職員、学生、地域の長老たちが、「アンナレナ・トネッリは母であり、姉であり、友であった」と宣言するプラカードを掲げて歩いた。女性の性器切除に反対するトネッリの活動を引き継いだサーラ・アブディラヒ・ファジャ（Sahra Abdillahi Faja）は、次のように述べた。「アンナレナが殺されたことを思い出すたびに、私たちは胸の奥深くで痛みを覚えます。マザー・アンナレナのような人物を私たちは二度と得ることはないでしょう。彼女の死によって、私たちは親を失ったのです。」⁷ 自らが仕える人々に寄り添った多くの女性宣教師たちと同じく、アンナレナ・トネッリは、自分が産んだ子供はいなくとも、ボラマの人々にとっての「母」となった。過去2世紀にわたり多くの女性宣教師が、地域の母として認められる権利を得たが、トネッリもその一人であった。「母」となった宣教師たちは、多くの場合、大家族の強い絆を有する文化の中で成功を収めた。独身を貫いた未亡人や修道女と同様、この「母」のイメージは、キリスト教の初期の時代に起源を持つ。すなわち、イエスを産み、それによって教会を産んだ母としてのマリアと重なるイメージであった。

⁶ Bashir and Hashim Goth, "Annalena Tonelli Found her Bliss by Becoming One with the Poorest," Oct. 8, 2004, Adwalnews Network, <http://www.awdalnews.com/wmview.php?ArtID=3854>.

⁷ Ibid.

18世紀以降のプロテスタント宣教に関して、最も重要で顕著な側面の一つは、主要な伝道モデルとして家族の役割が発展したことであった。モラビア教徒たちがプロテスタント宣教の開拓者としてアメリカ大陸へと航海した時、彼らは家族を同伴した。モラビア派の女性たちは文字を読むことができたため、アメリカ先住民やアフリカ系アメリカ人の女性たちに伝授した。プロテスタントの牧師は結婚を奨励されていたため、やがて19世紀から20世紀にかけて、宣教師の妻たちが宣教師として重要な勢力をなすようになると、彼女たちは、異文化という文脈に生物学上の母性を持ち込むことになる。

1810年にニューイングランドの会衆派の牧師たちは、神学生をインドへ派遣すべく、アメリカで最初の主要海外宣教団体、アメリカン・ボードを設立した。その若き聖職者たちは伴侶なしで出かけることを強く拒んだため、アメリカン・ボードは、宣教師の結婚を許す決定をした。米国から最初に海外宣教師として送られた5人の男性のうち3人は、1812年の出発前に素早く妻を見つけた。一方、他の2人と婚約予定であった女性の親たちは、自分の娘が宣教師と結婚することを許さなかった。危険な「異教」の地で娘が寂しく死を迎えるのを恐れたからである。最初の宣教師の妻たちは、当時としては教育レベルが高く、女性や子供を永遠の破滅から救うことで神に仕えるという、強い責任感を持っていた。宣教師との結婚は、彼女たちに宣教の召命を生き抜く道を提供するものであった。女性であるがゆえに、他の方法によっては、そのような宣教に携わることはできなかったのである。それにもかかわらず、宣教師の妻という概念への抵抗は、少なくとも1830年代までは続いた。西洋人がいない土地に女性と子供を連れて行くことは危険を伴うと考えられたためである。

最初の3人のアメリカ人宣教師の妻たちは、夫を助ける「アシスタント宣教師」として働いたが、その主な役割は、聖書翻訳、説教、教会設立といった男性の中核的任務を夫が達成できるよう、夫のために家庭を築くことであった。また、彼女たちは、牧師の妻として、女性と子供に仕える仕事を引き受け、その任務の中には、女性を教育することにより、女性の社会的地位の向上に努めることも含まれた。19歳のハリエット・ニューエル (Harriet Newell) は、1812年にマサチューセッツから出航して一年も経たぬうちに、出産の影響で死亡し、米国最初の「宣教師殉教者」となった。ロクサナ・ノット (Roxanna Nott) は、2年間のインド滞在後、夫の健康が悪化したため、彼とともにコネチカットに帰還した。

しかし、3人目の宣教師の妻、アン・ジャドソン（Ann Judson）の手腕により、夫たちの「助け手」として女性を派遣することの価値が確認され、男女のパートナーシップという新たなモデルが生まれた。アンが夫とともにインドで洗礼を受け直した時、彼女の名前は一般家庭にも広く知られるようになり、彼女はアメリカ人のヒロインとなった。そして、アメリカのバプテスト派は、夫妻を支援するため新しい宣教局を組織したのである。ビルマで働く宣教師の妻として、彼女は孤児たちを養子にし、女子教育や聖書の部分翻訳に取り組んだほか、アメリカ人による宣教についての最初の歴史書を著した。アンはまた、囚人に食料を与え、夫やその他のヨーロッパ人がイギリス帝国主義に抵抗してビルマ人により収監された際には、彼らの釈放のため交渉した。さらに彼女は、宣教史についての自分の著書を販売した収益を用いて、若いビルマ人少女たちを奴隷状態から解放した。多くの苦労のため38歳で亡くなったが、彼女の記憶は、20世紀になっても女性たちを宣教の使命へと駆り立て続けた。彼女の臨終の言葉がビルマ語であったことは、現地の人々への彼女の深い献身を物語っている。⁸ビルマのバプテスト派の女性たちは、今日でも、同派の女性グループを組織した創始者は「マザー」アン・ジャドソンであったと伝える。

19世紀から20世紀にかけて「母」として働いた宣教師たちは、自分が出産したか未婚であったかにかかわらず、多くの場合、捨てられた子供たちのため自宅を開放した。子供たちの世話は、女性宣教師による女性ならではの貢献であった。有名なスコットランド人長老派信徒、メアリー・スレサー（Mary Slessor）は、東ナイジェリアで、死を待つほかなかった寄る辺のない何百人もの女性や双生児たちの母となった。また、教派に属さず活動した宣教師、グラディス・エイルワード（Gladys Aylward）は、1930年に単身で中国に移住し、市民となる。そして、1940年には、彼女は多くの子供たちを集めて何日間も山々を歩き、危険な紛争地帯から彼らを逃れさせた。戦後には、台湾でグラディス・エイルワード・チルドレンズ・ホームを開設する。さらに、メイン州出身のアフリカ系アメリカ人、エリザベス・ホール（Elizabeth Hall）は、19世紀末にコンゴで13年間子供たちのために働き、「ママ・ホール」として知られるようになる。ママ・ホールは、そ

⁸ Dana L. Robert, "Protestant Women Missionaries: Foreign and Home," in Rosemary S. Keller and Rosemary R. Ruether, eds., *Encyclopedia of Women and Religion in North America*, vol. 2 (Bloomington: Indiana University Press, 2006), 834-43.

の後ジャマイカへ移住し、長年児童施設を運営した。また、スリランカにおける最初の独身女性宣教師であったエリザ・アグニュー（Eliza Agnew）は、「千人の娘の母」と呼ばれたが、それは、彼女が19世紀半ばに40年間にわたって1,300人の少女を教育し、その後も少女たちの家庭を訪問して支え続けたからであった。ヒンズー教から改宗した特権階級出身の女性、パンディタ・ラマバイ（Pandita Ramabai）は、20世紀初めに、夫を亡くし見捨てられた幼いヒンズー教徒のため、収容施設と教育施設を設立したほか、後には、女子孤児院を開いた。

孤児たちの「母」としての女性宣教師の働きは、プロテスタント宣教事業の中で行われた母性による宣教のほんの一面にすぎなかった。1850年代までには、インドにいたイギリス人女性たちは、上流階級のイスラム教徒やヒンズー教徒の女性の住居を自分たちが訪ねることができなければ、この女性たちがキリスト教のメッセージに触れることはけっしてないと認識するようになっていた。女性たちが身近な親族以外の男性と接触することは、文化的に不適切であると見なされていたからである。イギリス人女性がインド人の家庭に伝道できるようになるまでは — すなわち「教養あるヨーロッパの母親や女性たちが… インドの母親や女性たちとその家庭の中で自由に交われる道が開かれるまでは」⁹ — キリスト教宣教に前進は見込めないと述べたのは、オックスフォード大学のモニア・モニア＝ウィリアムズ（Sir Monier Monier-Williams）であり、彼のこの見解が広く引用されるようになる。妻であり母であるクリスチャンが家庭の中心にいて、クリスチャン・ファミリーという安定的な力が働いてこそ、男性の改宗者は信仰を維持できるというわけである。それゆえ、ハレム（harem）やゼナーナ（zenana）といった外部から遮断された婦人部屋を、女性宣教師が訪問することが重要であった。

19世紀半ばの女性宣教師たちは、「女性のための女性の仕事」という独自の宣教哲学を発展させた。すなわち、非西洋の女性と子供のために働くのが女性宣教師の主要任務であり、それを西洋の女性が支援するという見方である。「女性のための女性の仕事」という宣教観には、世界中の女性が姉妹であって、西洋文明の恩恵にあずかる女性たちは、アジア・アフリカの「異教徒」の姉妹たちの生活

⁹ 以下に引用されている。Rosemary Seton, “‘Open Doors for Female Labourers’: Women Candidates of the London Missionary Society, 1875-1914,” in Robert A. Bickers and Rosemary Seton, eds., *Missionary Encounters: Sources and Issues* (Surrey: Curzon Press, 1996), 51.

を向上させる必要があるとの想定があった。そのような見方は、西洋の女性を宣教活動へと動員する助けとなったが、一方では、極めて西洋中心主義的であり、女性宣教運動は文化帝国主義であるとの非難につながった。女性宣教師が政治権力や軍事力を行使することは通常なかったが、西洋の性規範に従って女性の生活を形作ろうとする活動が、西洋植民地主義の拡大という不明瞭な文脈の中で進められたのであった。

婦人部屋に住む「宣教未到達」の女性と子供が存在が明らかになったことが刺激となって、19世紀末には何十もの女性宣教団体が設立されることとなる。女性宣教師の支援者たちは、家庭がキリスト教化されれば、社会全体がキリスト教によって変化するであろうと信じていた。19世紀末までには、この論理が発展して、母親の改宗こそが宣教事業全体の成功の鍵であるとの議論が生まれた。女性宣教団体は西洋の教会の女性たちから組織的に少額を集金し、それを用いて女性宣教師をアジアやアフリカに派遣した。20世紀初めには、米国だけでも40を越える女性宣教団体に300万人が会費を納めており、「女性宣教運動」は、米国最大の草の根の女性運動を形成していた。20世紀初めには、既婚・独身を含めた米国出身の女性宣教師数は、およそ2対1の割合で男性宣教師数を上回っていた。¹⁰

西洋人女性宣教師が推進したクリスチャン・ホームの理想は、歴史的にキリスト教が結婚に関して一夫一婦制に力点を置いてきたことと、夫婦のパートナーシップという近代西洋の理想とが、組み合わせあって生まれたものであった。米国バプテスト派のヘレン・バレット・モントゴメリー（Helen Barrett Montgomery）は、1920年に主要教派初の女性会長となった人物である。彼女のような宣教指導者たちは、男女の基本的平等という想定に立つ宗教はキリスト教だけであり、イスラム教、ヒンズー教その他の宗教は、女性が劣等であるとの想定に立って、男性に多数の妻を持つことを許容していると論じた。これに対し、クリスチャンの結婚は、妻が尊重されるパートナーシップであり、男女両性に同一の性倫理基準を当てはめるものと見なされた。クリスチャン・ファミリーは、ともに食事をし、ともに礼拝し、子供たちの教育・清潔・福祉を促進するものであった。女性宣教

¹⁰ アメリカの女性宣教史については、以下を参照。Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of their Thought and Practice* (Macon, GA: Mercer University Press, 1997), and “The ‘Christian Home’ as a Cornerstone of Anglo-American Missionary Thought and Practice,” in Dana L. Robert, ed., *Converting Colonialism: Visions and Realities in Mission History, 1706-1914* (Grand Rapids, MI: W. B. Eerdmans, 2008).

師たちは、20世紀初めまでに、幼稚園や母子診療所の設立などを通して、最新の家政学、衛生学、育児法を宣教地へと導入した。

1938年にインドのマドラスで開かれた国際宣教協議会（the International Missionary Council）の会合では、世界中から集まった70人のプロテスタント女性が、「クリスチャン・ホームの形成」の意味について大規模な討論会を主催した。彼女たちの報告書によれば、クリスチャン・ホームとは、男女がパートナーの関係に立つデモクラシーの一形態であり、さらには、女性と子供の福祉の向上に資することによりキリストの力を証しするものであった。非キリスト教文化の中で生まれつつあった家庭関連のキリスト教儀式としては、アフリカでの家庭奉獻式、タイでの新しい米の祭り、日本での結婚式、異なるカーストがともに集うインドの日曜学校などの例が挙げられた。女性たちが古代の文化的伝統の上に全人的なキリスト教信仰を築いていくためには、家庭を基盤とした宗教がその主要な方法となると考えられたのである。

20世紀には、宣教師の母性の影響力は、キリスト教のあらゆる宗派に響き渡っていた。たとえば、カトリックでは、ジョーン・バーク（Joan Burke）が、20世紀末のコンゴ人修道女たちについて書物を著した。彼女たちは子を産まないため、当初「不妊の雌牛」と嘲笑されたが、コンゴ人をクリスチャンとしての生活や慣行へと導いたことで、その人々の「ママ」と呼ばれる権利を得た。¹¹ 1920年代パリの東方正教会信徒のあいだでは、マリア・スコブツカヤ（Maria Skobtskaya）が、極貧のロシア人難民のために「すべての人の母」となるよう、神の召しを受けた。「マザー・マリア」は、避難所や給食施設を開き、彼女の活動から「正教徒によるアクション（Orthodox Action）」という概念、すなわち、困窮する避難民に援助を提供する宣教事業が生まれた。捕えられ投獄されようとしていたユダヤ人の子供たちを救助したことで、ついに彼女はナチスにより逮捕され、1945年の聖金曜日にラーベンスリュック（Ravensbück）の収容所で死亡した。処刑直前のユダヤ人収容者と入れ替わったためであった。1980年代までには、スコブツカヤという先例の影響により、北米の正教会クリスチャンのあいだで宣教への関心が広く波及しつつあった。マザー・マリアは修道女ではあったが、一方、司祭の妻（Presbytera）を地域の「母」とみなす正教会の伝統が発展して、司祭の妻

¹¹ Joan Burke, *These Catholic Sisters are All Mamas! Towards the Inculturation of the Sisterhood in Africa: An Ethnographic Study* (Leiden: Brill, 2001)

たちが強力な宣教師の役割を果たすようになっていく。そのような状況下、アフリカや、1989年の鉄のカーテン崩壊後の東欧の旧共産圏において、既婚の正教会司祭が家族とともに宣教活動に従事していった。

キリスト教が非西洋文化へと広がるにつれて、家庭生活は、宣教師と地元女性にとって共通の優先課題となり、両者の接点として機能した。女性の役割には多くの点で文化による違いがあったものの、キリスト教が家庭生活を改善するはずだという考え方は、女性の改宗にとって、また、さまざまな教派の女性団体の創設にとって鍵となった。1930年には、中国の全国キリスト教協議会 (the National Christian Council of China) が「家庭のキリスト教化」というテーマで大会を開催し、90人の代表（うち3分の1が男性）が出席した。この時、チー・ユーチェン (Ch'i Yu-chen) 女史の指導の下、キリスト教協議会は、家庭のキリスト教化を担当する部門を設立した。第二次世界大戦後には、国際宣教協議会と世界各地の教会協議会が、「クリスチャンの家庭生活」に関する同様の会議やプロジェクトをアフリカ、東南アジア、その他の地域で主催した。

1970年代までには、大衆的なプロテスタント教派 — とくにペンテコステ系 — がラテンアメリカで急成長しつつあり、そのため、グアテマラ、コロンビア、ホンジュラス、ブラジルなどの、伝統的にはカトリック教徒であった人々のあいだで、かなりの数のプロテスタント少数派が生まれた。20世紀末のラテンアメリカにおける福音主義の広まりは、プロテスタントの家庭生活モデルが提供する安定した家族関係と密接なつながりがあった。大規模な都市化や人口移動に伴う破壊的な社会パターンという背景があったからである。家族が農村に移住するのに伴い、男性の所得への女性の依存度は高まったが、一方、男たちは飲酒、けんか、買春によって「男っぽさ」を振る舞うという新たな圧力や誘惑に直面していた。福音主義教会の成長に関する主要な研究によれば、改宗者数は、2対1の割合で女性が男性を上回り、一般的に、女性が男性を教会へ連れて来ることが、逆の場合より多かった。女性が夫を福音主義キリスト教へと改宗させることができれば、夫の収入はもはや男性の娯楽に浪費されることはなく、一家は安泰であった。人類学者エリザベス・ブルスコ (Elizabeth Brusco) の言葉を借りれば、ラテンアメリカの福音主義キリスト教は「戦略的な女性運動」として機能し、家庭を男性の優先事項の中心に据えるという主要な効果をもたらした。新たに改宗した福音主義派の男性たちは、飲酒、ギャンブル、愛人関係にふけるかわりに、妻と意思

決定を共有し始め、子供へのサポートを優先事項とするようになったのである。¹²

20世紀には、多くのアフリカ人がキリスト教に改宗し、1900年に800万人だったアフリカのクリスチャン人口は、2000年には3億2,500万人を超えた。その過程で女性を教会へと引き付け、会員として維持する上で、女性の教会団体がきわめて重要な役割を果たした。さまざまな教派で、マザーズ・ユニオン、女性祈祷組合、あるいは、南アフリカでは、「マニヤーノ (manyano)」として知られる教派毎の女性組織が、20世紀末に宣教師たちにより導入された。それらは短期間のうちにアフリカの諸教会の支柱となったが、とくにその背景には、男性が賃金労働のため都市へ移住していたという事情があった。メソジスト派の「マニヤーノ」では、女性たちが共に祈り、縫い物をし、資金を集め、子供たちにクリスチャンとしての行動について教育した。また、英国国教会の「マザーズ・ユニオン」は、「世界中の家族にキリスト教的ケアを」という標語を掲げ、2005年までに360万人の会員を擁するにいたった。南アフリカで、この組織は、保育所、貧民向け給食施設、孤児支援プログラム、識字訓練、結婚前カウンセリング、HIV-AIDS感染者のための保健指導などを運営した。

女性団体は、独自の教会ユニフォームを身に付けたり、地域の女性や少女を対象とした祈祷集会や伝道集会を催して、女性の連帯を推進した。また、女性たちは、病気の時や経済的必要のある時だけでなく、育児のためのアドバイスや支援を提供するなどして助け合った。女性祈祷組合の重要な機能の一つは、一夫一婦制への関心を喚起することであった。通常、女性たちはキリスト教式で結婚した場合にのみ入会できたため、教会組織は、女性たちにとって、夫を教会での結婚へと導き、それにより家庭生活を安定したものにする動機付けとなった。母親たちによる祈祷集会は、キリスト教が伝播し、多様なアフリカの文脈にそれが移入されていく上で、大きな推進力となったのであり、その重要性はどんなに評価してもし過ぎることはない。

生殖と母性は、すべての文化の女性に共通する女性ならではの現実であった。そのため、母としての宣教師、宣教師としての母、その両者が、異文化へのキリスト教の伝播において中心的役割を果たした。キリスト教的母性という理想は、女性に権限を授与するために用いられることもあれば、女性の家庭的性格を強調

¹² Elizabeth Brusco, *The Reformation of Machismo: Evangelical Conversion and Gender in Colombia* (Austin: University of Texas Press, 1995).

するために用いられることもあった。— 逆説的だが、時にはその両方が同時に進行していた。

女性の福祉と社会改革

2004年1月、頭からつま先まで全身を覆ったイスラム教徒の女性たちの一群が、ソマリアのベルベラ (Berbera) の学校の大ホールを興奮で埋め尽くした。レポーターのマギー・ブラック (Maggie Black) によると、壁のポスターには、次のように書かれていた。「武装解除の時が来た！武器を捨てよ！」¹³ 主要な演説者の中には、市長、指導的立場の長老、医師や助産婦たちがいた。彼らが促した武装解除とは、戦争兵器を放棄することではなく、「女子割礼実施者」の仕事道具であったカミソリの刃、はさみ、ナイフを捨て去ることであった。ソマリアでは、少女の95パーセントが女性器切除 (FGM) を施される。女性器の外部を切除し、陰部を縫い合わせ、小さな開口部のみ残すという、古代からのこの慣行は、死産、産婦の死亡、堪え難い痛みを伴う性交の主な原因である。この慣行の表向きの目的は、コーランに従い、ソマリア女性の純潔と女性らしさを維持することである。しかし、この風習はイスラム教以前から存在し、また、イスラム教の聖典の中には見られない。演説者たちがこの風習をイスラム教に反するものと宣言し、健康上の問題や切除を施される女性の苦痛について述べた後、この集会で最も重要な出来事が起こった。すなわち、6人の女子割礼実施者が自らの道具を捨てたのである。その後、歌と踊りが続いた。

この割礼反対集会に影響を与えたのは、殺害されて間もないアンナレナ・トネッリであった。ボラマで、彼女は助産師および地元の長老と協力して、3つの割礼反対チームを立ち上げており、最初の割礼反対集会の結果、24人の割礼実施者が道具を捨てた。この女性たちが生計を立てられなくなるという問題を解決するため、彼女たちが小規模ビジネスを始めるための募金が行われ、トネッリは彼女たちの子供の学費を支払った。トネッリが表舞台に出ることはなかったものの、伝統擁護派のあいだではこの運動への反対が根強かったため、これこそが彼女の殺害の真の原因であったとの憶測が生じた。FGMのため6回の死産経験がある

¹³ Maggie Black, "The time has come to disarm! Lay down your weapons!", *Guardian*, Jan. 26, 2004, <http://www.guardian.co.uk/world/2004/jan/26/gender.uk>.

妻を持つ、長老モハンマド・サイード (Sheikh Mohammad Sayeed) は、次のように述べた。「我々は性器切除について公然と語るのです。無邪気な少女を守るのは各自の責任であることを人々に納得してもらうためです。— そして、なぜ少女を傷つけるのかと彼らに問いかけます。我々だけでなく、全世界がこの慣習に反対しているのです。… アンナレナは今やボラマ人です。我々は彼女をディーカ (deeqa)、すなわち、贈り物と呼びましょう。彼女は多くのことを成し遂げました。結核センターと聴覚障害者学校を設立し、視覚障害者学校もまもなく開設されます。他人を助けるならば、その人をアラーは愛するのです。アンナレナはキリスト教徒ですが、アラーは彼女と彼女の仕事を愛しています。』¹⁴

医療活動と女性の権利

女性の権利、医療ケア、社会改革の三つを結び付けたアンナレナ・トネッリの活動は、女性宣教史における最強の中心的価値の一つである、女性の福祉の向上という価値を体現するものであった。1869年に米国メソジスト派の女性たちが、最初の女性医療宣教師クララ・スウェイン (Clara Swain) をインドへ派遣して以来、女性の宣教活動の中心的優先課題の一つは、医療ケアを提供し、女性の健康を害する慣習に抵抗することで、女性の生活を改善することであった。医療ケアへの関心は非常に強く、1909年時点で、プロテスタント女性宣教団体が支援したアメリカ人女性宣教師の10人に1人が、医師または看護師であり、アメリカのプロテスタント女性は、世界各地の80の病院と82の診療所を支えていた。

19世紀半ばには、西洋の女性が医療訓練を受け始めたのと時を同じくして、プロテスタントの女性宣教団体が設立されるようになった。この二つの運動が合流したのは、偶然ではなかった。なぜなら、「女性のための女性の仕事」という見方の主な根拠として、福音のメッセージには女性の身体的健康の改善が欠かせないとの理解があったからである。女性の健康に注意を向けることは、女性とキリスト教の両者に対する敬意を高めるのみならず、医療活動はイエスの模範に従うものであった。イエスはその宣教活動の中で、多くの女性や少女を癒されたのである。

¹⁴ Ibid.

アジアでは性別で社会生活が分けられていたため、女医の確保が急務であった。女性の医師のみが女性患者の治療にあたることができたからである。また、非キリスト教社会は、その他のキリスト教活動には反対の場合でも、女性治療者に対しては扉を開いた。たとえば、クララ・スウェインは、1870年1月の到着当日に14人の患者を治療し、その後ただちにインド人女性に医療を教え始めたほか、アジアで最初の婦人病院を設立した。彼女はまた、高い階級の女性たちが教育を受けられず社会から遮断されていることは、自らのキリスト教の信念に反することを明言し、女子嬰兒殺しにも反対した。1885年にケートリ (Khetri) の王は、彼の領地の医師となるよう彼女に依頼し、それにより、主要なヒンズー指導者とクリスチャン女性のあいだに重要な個人的関係が形成され、ヒンズー教の王国でのキリスト教活動が許容されることとなった。1873年には、メソジスト派宣教師ルシンダ・クームス (Lucinda Coombs) が中国で最初的女性医師として赴任した。中国は外国人や宣教師に敵対的であったにもかかわらず、その後2年のうちに、クームスは最初の婦人病院の開設を許された。また、1890年代初めには、最初の中国人女性医師たちが誕生した。— それは、一人の女性宣教師が彼女たちに幼少時から科学と英語を教授し、ミシガン大学医学部で修学させた結果であった。

医療宣教と女性の健康問題との結び付きは、必然的に社会改革を伴ったが、時にはその変化は緩やかで、たとえば、女性が職業人となることや西洋科学は、徐々に受け入れられていった。医療宣教師たちが願ったのは、女性の身体的ニーズに注意を向けることによって、従来夫や家族により女性が拒絶される原因となっていた条件を矯正し、それによって女性への尊敬を高めることであった。多くの場合、初期の女性医師たちは、伝統的社会慣習に反対するための証拠収集にあたった。たとえば、1890年頃、ナンシー・マンセル (Nancy Mansell) 博士は、成人男子との性交による若い花嫁の死亡率に憤慨し、インド議会在結婚最低年齢を12歳に引き上げるよう嘆願運動を指導し、成功した。19世紀末から20世紀初めには、女性医療宣教師および教師たちが、中国での纏足、アフリカでの女性器切除のほか、児童結婚、強姦その他の虐待を伴う社会慣習に反対した。彼女たちは、宣教団体と宣教現場の両方における現状維持勢力からの反対に直面することが多かったが、最終的には目的を達成した。それは、彼女たちが宣教地の文化の中の進歩的指導者たちと連携して活動したからである。

未熟な性関係や出産の悪影響は、宣教師たちが19世紀末から今日にいたるまで

引き続き憂慮してきた事柄である。たとえば、2005年には、膀胱と膣の瘻孔が少なくとも年間10万人の女性に発症しつつあったが、これは、あまりに低年齢で医療ケアなしに出産することにより、膣と膀胱のあいだに裂け目が生じるものである。そのような女性たちは、失禁や不妊を患い、悪臭を放ち、家族から拒絶された。瘻孔の85～90パーセントのみが治療可能であり、その場合も失禁は残った。北アフリカの少数の医療宣教師や近くの宣教船が、貧しい女性たちの瘻孔治療、特定の村々での世話、職業訓練の提供や、新生活スタートの援助を専門的に行った。そのような支援は、傷を受けた女性たちの自尊心を高めることにつながったが、同時にそれは、伝統的な社会慣行に挑戦することでもあった。

女性の権利のために闘うという伝統は、女性宣教運動が残した遺産であり続け、今も非キリスト教諸国でキリスト教を証しする重要な要素である。たとえば、日本による満州侵略後の1932年、日本の人口に占めるクリスチ안의割合はごくわずかであったにもかかわらず、日本人クリスチャン女性たちは、勇敢にも日本がその侵攻を悔い改めるよう要求した。1970年代には、日本人クリスチャン女性でジャーナリストであった松井やよりが、アジアの「セックス・ツアー」に参加する日本人男性の慣行に反対する大衆抗議運動を指導した。松井は、日本人による中国人虐待について、幼少時にクリスチ안의両親から聞いており、1980年代には、「慰安婦」問題を世界に暴露した。朝鮮人をはじめ、推定20万人の日本人以外の女性たちが、戦時中日本軍によって「性奴隷」として使われた。2000年には、松井を代表とするグループが、8カ国の女性判事や被害者とともに女性国際戦犯法廷を主催し、同法廷は、天皇と日本軍は性奴隷につき有罪であるとの判断を下した。性奴隷に反対する松井の立場の中心には、フェミニストとしての見解があった。が、同時に、女性を沈黙させる伝統的な日本の礼儀に反して彼女が立ち上がることができたのは、非キリスト教国におけるクリスチャンとしてのアイデンティティがあったからである。

女性の健康と人権の擁護は、宣教活動の中でも、今なお異論の多い分野であり、危険な分野でさえある。なぜなら、それは、多くの場合宗教が是認する家父長制的慣習に異議を唱えるものだからである。女性の益となるよう社会改革が成果を上げるためには、宣教師と地元リーダーとのあいだのパートナーシップが常に必要であった。実際のところ、そのようなパートナーシップがなければ、女性宣教師たちは、無神経な西洋の「文化帝国主義者」であるとの非難を受けうる。男性

宣教師の活動と同様、過去数百年間の女性宣教師の活動は、西洋植民地主義を背景として行われてきた。性別に基づく役割を変えようとする女性宣教師の試みには、多くの場合、その前提として、地元の伝統文化より西洋の慣行の方が女性にとって益であるとの見方があった。それゆえ、アンナレナ・トネッリが女性器切除に反対した際には、文化的な無神経や帝国主義的になるのを避けるため、彼女は背後にとどまって、イスラム教指導者や助産婦たちと連携のもとに活動した。長老モハンマド・サイードは、金曜日の祈祷礼拝を利用して、コーランはFGMを支持していないことや、人間の口と同様に、膣は切除され縫合されるために神により創造されたのではないことを説いた。サイードの支持があつてさえ、女性の健康問題へのトネッリの関与は、彼女の命を危険にさらすこととなった。

21世紀初めにイスラム世界と西洋世界のあいだの緊張が高まり、宣教師は西洋植民地主義を体現するものであったと認識される状況下で、殺害された女性宣教師は、トネッリだけではなかった。女性の役割については、典型的な西洋の見方と、典型的なイスラム教の見方のあいだで、その記述に大きなギャップがあるため、イスラム教徒の女性と連帯して働く医療宣教師たちは、自分たちがコントロールできない「文化の衝突」の犠牲者となる危険にさらされていた。— それは、地元の女性たちが宣教師の存在に感謝していても、状況は同じであった。2002年12月30日に、イエメンのバプテスト病院で、銃を持った男が57歳の婦人科医マーサ・マイヤーズ（Martha Myers）を暗殺した。彼女は分娩を助けたり、貧しい女性の健康上のニーズに応えるなどして、そこで24年間働いていた。同年にはすでに、スイス人の看護師であり助産婦でもあったベレナ・ケーラー（Verena Kerrer）がソマリアで、自分の病院と学校での勤務中に銃撃されていた。トネッリの殺害の場合と同じく、数千人の一般イスラム教徒たちが、彼女たちの殺害に対する抗議行動を行い、キリスト教徒であった「母」たちのために公然と悲嘆にくれた。一般的に、クリスチャンの女性医療従事者は、人々を改宗する試みとしてではなく、むしろ、人間のニーズに対するキリストの関心を証しするものとして、自らの仕事を捉えていた。それにもかかわらず、20世紀末になると、急進的なイスラム原理主義者のレトリックは、キリスト教的人道主義に立つ働き手たちを、福音伝道者が変装したものであるとして非難した。

教育

2004年11月、万雷のような喝采がガートルード・イベングウェ・モンゲラ（Gertrude Ibengwe Mongella）大使を迎えた。アフリカ連合議会とアフリカの民主化という題目で、ボストン大学教授陣に向けて、彼女が演説するため立ち上がった時のことである。モンゲラ氏は、その少し前にアフリカ連合汎アフリカ会議の初代議長に選ばれ、アフリカ大陸で最高位の政治職についた女性となったばかりであった。彼女は数多くの荣誉ある職務に就いたが、その中には、祖国タンザニアでの女性問題担当国務大臣、国土・天然資源・観光大臣、与党の社会サービス部会議長、インド駐在高等弁務官などが含まれる。1993年から1995年までは、国連事務総長補佐の任にあり、より最近では、世界保健機関の親善大使を務めた。教師、妻、4人の子供の母、そして、フェミニストとして、1995年に北京で開催された国連国際女性会議では事務局長を務め、世界中の女性の福祉に対する献身を表明した。

モンゲラ氏は演説を始めるにあたり、主催者への感謝を表し、それから一息ついて、次のように述べた。「私の国にやって来て私が学んだ女学校を創設してくださったアメリカ人宣教師の方々に、私は感謝しなければなりません。メリノール修道会の活動がなかったならば、私のような若いアフリカ人少女たちは、教育を受けたり、教師になったり、あるいは、大学で学ぶ機会を得なかったことでしょう。」「しかし、なぜ今のアメリカ人は、かつてのように学校や病院の設立に力を注がないのでしょうか？」

女性の福祉に関する国連の統計によれば、女性の地位をめぐる20世紀最大の改善は、女子教育の改善によるものであった。さまざまな研究によると、女性の学力向上は社会に多くの富をもたらし、小家族化につながった。女性宣教活動の歴史の中で、最も長きにわたり成果を上げたのは、世界各地での女子教育の導入であった。20世紀初めまでに、日本、朝鮮、中国、その他の地域において、女子校の大半が宣教師によって創設されており、それは女子教育に対する社会的偏見がある中で進められた。

モンゲラ大使の言葉が示すように、19世紀および20世紀初頭の女性宣教師の大半が、自らを教師と見なし、教育機関の設立と人材提供を中心的使命であると考えていた。女性たちが説教や儀式的行事に携わることは、通常、教会規則により

制限されていたため、女性にとっては教育がそれらに匹敵する務めであった。教会規則のため「説教する」ことはできなくとも、女性が「教える」ことは聖書が認めていると、女性宣教師たちは主張した。最初のプロテスタント教育宣教師となったのは、インドで活動したイギリス人宣教師の妻たちであった。アメリカ人のプロテスタント宣教師の妻たちがアジアへ赴いた時には、イギリス人の妻の模範にならい、自分たちで学校を創設した。1822年には、未婚のアメリカ人女性が初めて海外宣教師となる。— アメリカ人の元奴隷ベッツィー・ストックトン（Betsey Stockton）が宣教師家族に同伴してハワイへ出かけ、子供たちのために学校を開いたのである。ストックトンは米国へ戻った後、カナダで先住民の子供たちに教え、その後、黒人の子供向けの学校の校長となった。1830年代には、イギリス人の宣教支援者たちが、未婚女性教師を宣教師として派遣すべく、東方女子教育協進社（the Society for Promoting Female Education in the East）を設立し、1843年には、ロンドン出身のメアリー・アン・アルダーシー（Mary Ann Aldersey）が中国初の女学校を開設した。それは最初の「アヘン戦争」が終結し、条約により外国人に向け開港地が設けられた時のことであった。しかし、未婚の女性教師が広く受け入れられるようになるのは、19世紀末に、教派毎の多くの女性宣教団体が組織され、教師が派遣されるようになってからのことである。

アンナレナ・トネッリによって聴覚・視覚障害者のための学校が開設されたのと同様に、女性による教育活動と医療活動は同時に進行した。アメリカのメソジスト派の女性たちは、最初的女性医師クララ・スウェインを派遣するとともに、1869年にイザベラ・ソバーン（Isabella Thoburn）をインドに送り、そこで彼女はアジア初の女子大学を創設した。19世紀初めに孤児の養子縁組や家庭での教育から始まった試みが、次第に寄宿学校や通学学校へと発展し、さらに、19世紀末から20世紀初めには、大学へと発展していった。教育機関という枠組の中で、女性宣教師たちは、学問的、実践的、宗教的科目の女子教育に従事することができた。西洋において女子高等教育の受容度が高まるにつれて、20世紀初めには、女子高等教育が従来の「宣教地」のいたるところで最盛期を迎えた。1909年時点で、アメリカの女性宣教団体は、日本、中国、朝鮮、インドにおける11の女子大学を含め、3,200を超える学校を支えていた。

女子教育は、家族をキリスト教化し、現地の牧師に妻を備える可能性だけでなく、女性の強力なリーダーシップを育成する可能性を含んでおり、それは、20世

紀初頭に社会革新主義者たちが取り組んだ近代化プロセスの一部をなしていた。その結果、高度な教育を受けた非西洋人女性の先駆者世代が、女性の識字能力、高等教育、さらには、異文化間の連帯に取り組むこととなる。この女性たちの第一世代は、西洋で学位を取得して、祖国の人々のための教育「宣教師」として帰国した。たとえば、ヘレン・キム（Helen Kim）は、1931年に朝鮮人女性初の博士号取得者となった。彼女のリーダーシップの下で、梨花女子大学 — もともとはメソジスト派の女子ミッション・スクールであった — は、世界最大の女子大学となる。また、プリンマー（Bryn Mawr）大学の卒業生であった河井道は、日本 YWCA の会長や重要な女学校の校長を務めたが、1930年代には、主要な国際主義者となり、世界教会主義運動の指導者となった。南アフリカからは、長老派の教師でソーシャル・ワーカーでもあり、アフリカ女性全国協議会（the National Council of African Women）を創設したミナ・テンビカ・ソガ（Mina Tembika Soga）が、1938年に国際宣教協議会の大会へと赴き、国際会議に出席した最初のアフリカ人女性となった。その後、ソガは、米国を旅行して、南アフリカのアパルトヘイトに反対する演説をし、さらには、米国における人種隔離に疑問を投げかけ、「逆方向の宣教師」の役割を果たした。

1960年代になると、教師としての西洋人宣教師の役割は、すでに宣教事業としては重要度が下がっていたが、それは、女性や女子の教育という概念が、世界中でより広範に受け入れられ、各国の政府が女性市民を教育する役割を担うようになったためであった。1960年代には、女性が労働市場に参入し、多くの職業が女性に開かれるとともに、西洋の主流教派の教会では、宣教への熱意が衰え、宣教師として教育職に生涯を捧げる道を選ぶ女性は減少した。1968年には、西洋人カトリック修道女の数はずでに減り始めており、修道女としてとどまる場合も、教会が運営する大規模な中流階級向けの学校から出て、貧しい地域の非公式な環境へと移り、そこで貧民のあいだで人権や社会正義の問題に取り組む例が多くなった。異文化で働いた多くの女性たちにとって、基本的な識字訓練、聖書研究、虐待されていた女性のための技能訓練は、依然として重要な優先課題であった。しかし、未婚の女性宣教師が長期にわたって宣教団体の教育機関で働くという時代の全盛期はすでに過ぎ去っていた。— モンゲラ大使が演説の中で、郷愁をもって振り返ったように。

もてなしと福音伝道

初期の女性宣教師は、説教や異文化への福音伝道に関心を持っていたものの、社会慣習や教会規則のため、たいていの場合、彼女たちが福音伝道者になることはできなかった。説教と教会設立は、概して「男性の」仕事であると考えられていたからである。女性宣教師の場合、自宅でもてなすことや、非キリスト教徒の女性の家庭を訪問することが、言葉でキリスト教のメッセージを証しする機会を得るための主な手段であった。

見知らぬ人々を歓迎するようにとイエスが信徒に求めたように、もてなしによる宣教のルーツは新約聖書の中にある。キリスト教の歴史を通じ、女性による福音伝道にとっては、もてなしがとくに重要なコンテキストであった。女性が公の集会を導くことは文化的なルールに反していたため、公然と福音を説くことは、たとえ不可能でなかったとしても、困難であったためである。もてなしには、玄関スペースを開放することが多かった。すなわち、そこは全くの公の空間と完全な私的空間のあいだの中間的な場所であり、人々は、そこに招き入れられて接待を受けることができた。両大戦間期には、国際的なキリスト教女子青年会（YWCA）が、行き場もお金もない数十万人のヨーロッパ人学生避難民のために、気軽に立ち寄れるコーヒーハウスを設営した（これはフォイアー運動と呼ばれた）。ある女性伝道者が述べた次の言葉は、女性による宣教方法の精髓を表している。「世界の福音化においては、一杯のお茶の重要性をけっして軽んじてはならない。」

困窮している他人をもてなすことは、アンナレナ・トネッリが実践したように、人々を包含する宣教のあり方であった。トネッリが、社会から見捨てられた人々の世話をした通りである。人々をもてなすことは、女性の宣教形態としては、表面上かなり決まりきった活動形態であるように思える。育児や食物の提供という、ほとんどの文化における女性の役割と一致する活動であるからである。しかし、その一方で、もてなしは、実際には、支配的な文化規範に対する危険な挑戦を伴う場合もある。見知らぬ人を歓迎することは、必然的にリスクを伴う。たとえば、トネッリが HIV 陽性の母子を別の地区から自分の病院に迎えた時には、そのことで殺人の脅迫を受けたのである。

19世紀末に女性が自分たちの宣教団体を設立するようになると、それらの団体

が未婚の宣教師を支援したことで、女性伝道者という概念がより受け入れられやすいものとなった。19世紀半ばのビクトリア期のイギリスでは、「女性慈善訪問員」のネットワークが、ロンドンのスラムに入って貧民を訪問し援助した。ドイツ、イギリス、アメリカでは、プロテスタントのディーコネスが地域に共に暮らし、都会の貧民を訪問し、病人の世話をし、福音を伝えた。1878年には、都会の貧民のための福音と奉仕の運動として、救世軍が起こされ、この活動は、一般に「ハレルヤ娘」として知られる女性奉仕者にその働きの多くを頼った。彼女たちは、公衆の場で歌を歌い、教えを説いたのである。貧民街のギャングやけんか好きの群衆が救世軍の女性たちに煉瓦や腐った野菜を投げつけたが、この女性たちは、大酒飲みの改宗に非常な力を発揮した。また、救世軍は、改宗した人々に仕事、食料、住居を提供した。

中国、朝鮮、その他のアジア・アフリカ諸国において、女性宣教団体は、「バイブル・ウーマン」と呼ばれる地元の分別ある女性たちを雇って村々を旅し、女性の家庭を訪問して、聖書研究、賛美歌、祈りを導いた。西洋人女性宣教師はしばしばバイブル・ウーマンとパートナーを組んだのである。白人女性の訪問が多くの人々を集め、バイブル・ウーマンが馴染みのある方言で話しをして、それから、集まった女性たちに二人がいっしょに教えた。別の時には、西洋人女性が行くことのできない所や求めに応じられない所へと、バイブル・ウーマンたちが聖書の言葉を携えていった。現地の言語を操れる西洋人女性にとって、家庭訪問や村々への訪問は、引き続き優先すべき重要な仕事ではあったが、バイブル・ウーマンはより安価に雇用でき、集団での聖書や読み書きの訓練が可能であった。バイブル・ウーマンの役割は、アジア・アフリカのクリスチャン女性ができることのできた、最初の独立した宣教職であった。

ほとんどのバイブル・ウーマンは、自分の民族集団内で活動したが、中には、独自に「海外宣教師」となった女性もいた。たとえば、中国人バイブル・ウーマンで医師でもあったドーラ・ユー（Dora Yu）は、朝鮮において文化を超えて活動した先駆的宣教師であった。ユーは、メソジスト派の女性たちが運営した中国初の女子医学校を1896年に卒業し、1897年には、同僚であったアメリカ人宣教師ジョセフィン・キャンベル（Josephine Cambell）とともに、朝鮮におけるメソジスト派初の女性宣教団体を創設した。6年にわたり、ユーはそこで医師、教師、翻訳者、説教者、家庭訪問者として活動した。1903年には、バイブル・ウーマン

という役割により、2,540人の女性を訪問した。彼女は1904年に中国に戻った後、独自の宣教会を設立し、中国南部地方で著名なリバイバリストとなった。1920年代には、聖書学校を運営し、預言についての聖書協議会を開催したほか、有名なリバイバル集会で説教し、そこから、教派に属さない中国人男性牧師の第一世代が生み出されていった。ドーラ・ユーの生涯は、「女性のための女性の仕事」という宣教哲学、リバイバリズム、そして、中国土着のキリスト教という、三者間のつながりを体現している。

アフリカにおいて、女性伝道者は、敵対的な男性牧師と非キリスト教系住民という、両面からの抵抗に直面した。しかし、まれではあったが、女性伝道者の成功例もあった。「ズールー族への使徒」と呼ばれたルーテル派のポーライナ・ドラミニ（Paulina Dlamini）はその一例で、彼女は1890年代に南アフリカ人の敬虔な白人農場主から支援を受けて説教した。伝道者として顕著な成功を収めたもう一人の宣教師としては、アマンダ・ベリー・スミス（Amanda Berry Smith）が挙げられる。彼女は元奴隷のアフリカ系アメリカ人であったが、アメリカのキャンプ・ミーティングでの歌や説教で宣教を開始し、その後1880年代には宣教師としてインドに赴き、それからリベリアへ行った。スミスは、福音伝道とともに、困窮したアフリカ人やアフリカ系アメリカ人の子供のための孤児院運営にも従事した。また、ウェスレー系メソジスト派の女性宣教支援団体は、1920年代から1990年代まで南アフリカのバイブル・ウーマンを支援し、彼女たちは、女性を訪問し、イエスについて語り、さらには、スワジランドやトランスバールの少女たちを教育した。このバイブル・ウーマンたちは、わずかな持ち物しか持たずに何マイルも歩いて、農家で暮らす田舎の女性たちを訪ね、霊的な事柄について論じた。このように、南アフリカのバイブル・ウーマンは、植民地の白人宣教団体とアフリカ土着のキリスト教の本格的開花とを結び付ける重要な役割を果たした。

20世紀末までには、アフリカの一般民衆のあいだでキリスト教が急成長したため、女性による伝道、および、女性に対する伝道の新たな機会が生まれた。女性の識字率が高まり、さらには、一般信徒に力を授ける聖霊の働きについての肯定的な見方が広がるにつれ、癒しと祈りの運動における女性の働きが、世界各地の新たな教会設立にとって中心的要素となった。ガーナとナイジェリアのペンテコステ派においては、夫妻で活動する著名なリバイバリストと教会指導者のチームが出現し、彼らはしばしば「解放のミニストリー」を専門として、人々から悪霊

や悪魔を追い払った。

女性一人での教会設立はきわめて困難であったが、時には女性の癒し手たちが社会の縁辺にある人々を引き付けて、新しい教会が生まれることもあった。たとえば、研究者イザベル・フィーリ (Isabel Phiri) が報告したように、1990年代には、マラウィ人女性数人が主要な教会設立者となった。¹⁵ マイ・チボンデニ (Mayi Chipondeni) は、病気と信仰による奇跡的な癒しを経験した時、セブンスデー・アドベンチスト教会のディーコネスであったが、自分の教派から追放されて、1992年にナマタパ癒し教会 (The Namatapa Healing Church) を創設した。この教会は、清めの儀式を専門とし、その中で彼女は各人に預言をし、人々は罪を悔い改めて悪霊を吐き出した。清められた後で、その人々は粥を食べて力を回復した。1999年までに、チボンデニはマラウィとモザンビークで75の集会を創設した。彼女は自らの癒しの運動を福音伝道の一形態であると考えていたが、それは、人々をイエス・キリストに従う確信へと導くことが目的であったからである。

もう一人のマラウィ人伝道者として、マーシー・ヤミ監督 (Bishop Mercy Yami) があげられる。彼女は1994年にゾダブウィツァ (Zodabwitsa, マラウィの共通語チェワ語で「驚異的」の意)「奇跡」ミニストリーを創設し、1999年までには5つの教会を擁するようになっていた。彼女は、財政支援のない貧しい田舎の女性、視覚障害者、および、麻薬中毒者のあいだで伝道したが、これら社会の縁辺にある人々を思いやりのミニストリーにより歓迎するようにとの神の召しを自覚していた。それらの人々は、主流教派の教会からは最もなおざりにされた存在であった。それゆえ、彼女は視覚障害者への衛生的な水の提供や、衣食の配給に取り組んだ。彼女の第一の召命が福音伝道であったことは、リバイバル集会や野外礼拝における彼女の説教者としての役割の中に表われていた。

ヤミ監督とマイ・チボンデニの物語は、境界を超えて伝道者や教会設立者として活動した地元女性たちの重要性を示す具体例である。彼女たちは、もてなしと福音伝道を組み合わせたユニークなミニストリーに取り組んだ。40～50年前には、西洋人女性が聖書を手に長距離を歩き、あばら屋に住む女性たちを訪問したものであったが、アフリカでキリスト教が広まるにつれて、その伝道事業の多くが、

¹⁵ Isabel Phiri, "African Women in Mission: Two Case Studies from Malawi," in M. L. Dancel, ed., *African Christian Outreach*, vol. 1: *The African Initiated Churches* (Menlo Park, SA: Southern African Missiological Society, 2001), 267-93.

今やアフリカ人女性たち自らの手により行われている。

＊

キリスト教宣教史は女性に焦点を当てなければならない。世界のクリスチャンの過半数は女性なのであるから。会員数から判断するならば、キリスト教は主に女性の運動である。一般的に女性宣教師は、異文化への福音伝播を奉仕、癒し、教育、もてなしという枠組の中に位置づけてきた。独身修道女、母、教師、ソーシャル・ワーカー、伝道者、医師など、いずれの立場であっても、女性による信仰の証しは、人々の関係を築いていく。改宗が可能でない場合も、ソマリア人イスラム教徒の中で生きたアンナレナ・トネッリの献身的生涯が示すように、キリスト教の思想や価値観は、女性が織りなす人間関係の網目が主要な媒介となって、文化の壁を超えて広がってきたのである。

